


 巻頭言

夢からのスタート



伊藤 英則*

明けましておめでとうございます。

少年の初夢は、ドラえもんやサッカーゲームをしたことかもしれない。少年は、昨年の夏休みに名古屋で開催された第15回IJCAI、第1回ロボカップ、AI学術展示会会場などに見学にきていた。

このとき、S社が出展した2匹の小型4足ロボットを撮ったスナップ写真に偶然写っていた野球帽の少年である。笑顔でロボットに興味を示していたのが印象深い。

成人した社会人については今さら何も言及するつもりはないが、IJCAI、ロボカップやAI学術展示などが、多くの少年少女たちに人工知能の夢を強烈に抱かせたはずである。

約10年後、この少年少女たちの世代の一部が人工知能の世界に参入してくる。彼らが素直な今の感覚を持ち続けていれば、必ず夢から出発した人工知能に挑戦しようとするはずである。

これに引き換え、我々社会人は無意識に現実から出発して夢を逆向きに追っかける、現実からの積上げ型の活動をする傾向がある。つまり、産業界ではすぐ明日のビジネスに結びつけ、学業界では今日の成果のための類似型研究に結びつける傾向がある。さらに、官界では産業育成のための仕組みを練り上げ活性化する。これらは当然のことで、現実的で効率的に成果を確実に達成する手法であるのでこれを否定することはできない。

これらの二つの方向から進めたアクティビティの到達点に接点や重なりが、これまでの活動方法の踏襲ではできないのではと考える。

その厳密な根拠となるかどうかは明確ではないが、次の事実がある。その一つには、これまで産業界が精力的に活動し、オーディオビデオ製品、家庭電化製品、自動車などほとんど世界を凌駕してきたにもかかわらず、コンピュータシステムの中核部にX社製品インサイドのマークの付いた製品があふれているし、またその二つ目には、学業界でも精力的に研究論文を作成しているにもかかわらず、大学で教える情報処理や人工知能の分野の教材におけるすべての基本的概念は国産ではない。

とすると、現在もこのように欠落している部分があるが、その存在を意識し自覚する必要がある。今までに、それが何かをタイムリーに一つ、二つと列挙して整理されてきてはいる。しかし、それで十分であるとは保証できない。これが人工知能の苦しいところであり奥深いところである。

今のところ、「これが人工知能の研究である」と万人が認める固まった境界、範囲、対象があるわけではないので、この分野はきわめて挑戦的の分野であるともいえるのである。が、ともあれ成人が進める方向から出発して到達できないところが存在していることを認めるならば、夢から出発したアクティビティを育成し活性化する必要がある。残念ながら一般的に成人にはその自覚がだんだんと薄れていく傾向がある。現実から出発することに慣れきった成人には、これに理解を示し、育成し活性化支援することが実際は無理なことかもしれないので、せめて、夢からの芽を紡いではいけないことに気づく必要がある。

あの少年少女たちの世代が夢を追いかけて活動を開始したとき、十分に活躍できるための環境を用意しておいてあげたい。彼らが自由闊達に思考し、実験実証し、発表できる偏りのない柔軟な社会組織と学会組織を今から作り上げる必要がある。無意識のうちに現実の積上げ方式に移行する傾向が我々には文化として伝統的に持ち合わせていることから、意識した継続的反省と努力が必要である。

経済活動、生産活動や教育研究活動などいたるところ空洞化閉塞化現象で満ちている今、読者諸兄にこれから参入してくる若人たちの独創的でハイリスクハイリターンな人工知能の活動への育成支援の環境作りを期待する。

* 名古屋工業大学知能情報システム学科教授